

いまも北満の地平線には、号泣の幽鬼は青く燃え、遺骨は星のごとく雑草に埋もれているであろう。さらに掠奪された婦女子、買われていった幼児等は、いま東北の空でいかに生き、いかなる運命を迎えているであろうか。

民族を代表して、血の償いを強制された旧北満の悲劇は、戦後三十年の、今日になっても、まだ続いているのである。

私たちの思い出の中には、危急の際、友愛の手を差しのべ、引揚者たちを救った中国人も多数ある。これらの記憶も、感謝の念で記録され、新しい交友親善のきずなとなることを祈念するものである。

積み残された三百五十人の遭難

——破損と漂流の末、支那海近くまで——

岩手県 田 中 弘

二十三日、乗船初日の当時からちょっと動揺していた中共軍は、私が二十四日の引き揚げ事務が完了して中央

区分会の岡崎周治氏と連盟本部事務所に書類や印鑑類を返納に行った時には、ちょうど終戦の大詔が放送された日の夕日のような変に息苦しい空気であり、なにか非常に恐れているような感じでした。

岡崎氏に新任の連盟最高幹部（鎮江區か鎮安區の連盟員で、汽車で引き揚げる人々の収容所で日僑管理課長の通訳をしていた者。）に紹介せられ、残留日本人の管理員として努力するむねを約束して一足先にそこを出たのですが、岡崎氏とは後で元第一街の世話役だった光永氏（当時、私の街に居住）と最後のお別れ会をすることにしていた。そこで、一応街公所に寄ってみましたところ、机も椅子も皆どこかに運び去られてガランとしているので、すっかり驚いてしまいました。その時、文書（ウォンスウ・中国の事務員）をしていた董（トウ）先生が外から帰ってきて、「田中、大変だ。俺たちは八路军に街長はじめ基幹隊長も皆寛甸につれていかれる。」と言われ、事態が最悪の極点に来ているなと思いました。帰宅して岡崎氏を待っていると、彼は息を切らせてやってきました。そして、戦況は中共にまったく不利であり、

彼は明日の最後の引き揚げ船を送り出した後、中共軍と行を共にすると言いだしました。私としても残留邦人の世話をみなければならない義務があり、そのことについて彼と相談したところ、「君は奥さんがあるし、それに妊娠しているから（二十五日が予定日）内地に引き揚げろ。」と言うので、「明日の朝五時に集合なのにどうして準備ができるか。また、家内は明日が出産予定日で、とても内地に上陸するまでその時期が遅れるとは思えない。帰国は嫌だ。」と言ったのです。けれど、明日以後のことは保証できないと彼が言うし、どうせ残留してても中共軍に調べられることは確実であり、その間の家族のことを考えるとやはり引き揚げざるを得ないと覚悟して準備に取りかかることにしました。

その時はもう夕方六時ごろでしたが、幸いなことに明日の引き揚げで助理員の山下君と私の兄の同僚（銀行員）だった河原君が、途中の弁当やいろいろの準備のため私宅に泊まることになっていたので、急に私たち家族三人分の追加と出産用具を備えることになり、七時半ごろやっ

と皆で落ちて着いて、家内が弁当を作り私らは高粱酒を飲

みはじめました。まだその日は魚の刺身等があったので、その後起こる安東の変貌などは予想もせず、ただ前途に一抹の不安を感じながら飲んでいました。

九時ごろに第一回目の爆発音を聞き、一同ギクリとして窓の外を眺めました。続いてまた爆発。それから連続に爆発しております。その間に電灯は消えて、しばらくして窓が火炎で赤く反射しております。もういくら飲んでも酔うどころではありません。準備さえも真っ暗で出来にくくなってしまいました。

翌朝五時ごろ付近の支那人たちがやってきましたが、私を知っておる連中でもあるので私が出た品物に手をつけないと約束させて、私らは持てる物だけ持って出ることになりました。ところが、荷物を運んでいる間に彼らは手当たり次第に略奪を始め、私が二度目に家に入った時はもう何も無いといってよいほど綺麗に運び去られておりました。

幸い顔見知りの三輪車手が碼頭（埠頭）まで送ってくれるというのですが、彼の性質を知っている私としては、途中で急に気が変わって暴行もしかねない男のこと

でもあり、多少心配ではありましたが、歩いて埠頭まで行くとすればもっと大きな危険があるかも知れないので、意を決して荷物を全部積んで埠頭に向かいました。

途中、多くの車夫や苦力が倉庫から塩、紙などを略奪して来るのに出会いました。中にはドラム缶をゴロゴロ転がして来る者もあり、その連中が私の雇った車夫に、「なんで今ごろ客の荷物など運んでおるのだ。儲け口はそこらにいくらでも転がっているのに。」と声をかけていきます。しかし、彼は悪党ではありませんが埠頭の入り口まで送ってくれました。

埠頭の状況は言うに言葉ありません。松岡氏の書いておられるとおりです。

岡崎氏のことがかかります。昨夕、光永氏の所で訣別の食事を一緒にしたはずなのに、その後の消息は光永氏も知らないという。ところが、十時ごろ彼はひよろひよろになってやって来ました。眼にいっぱい涙を浮かべ、被服もよごれていました。彼の服装（連盟員の紺色制服）を見て周囲の人たちは皆寄ってきて激しい批難の声を浴びせます。「殺してしまえ。」などとも。一人と

り残された彼に策がありようもなく、また、彼を責めてもどうにもならないことを一同知っているので、善後措置をいろいろ協議、努力しているうちに傭船がそろそろ寄ってきました。

しかし、あの最後の場合にもさすが日本人だと思ったことは、皆で呉別の船の割り当てをして比較的秩序正しく乗船したことです。

私は東北ですが宮崎県に編入してもらっていたので、あの松岡氏らの乗られた船に初め乗船と決まって荷物など積み込み、女・子供を先に乗船させている間に宮崎組は満員で乗れなくなると決定され、せっかくのものも降ろされてしまいました。

その間に他の帆船は割り当ての人員を乗せてどんどん岸壁を離れていきます。積み残された人々は、特に女の人たちは泣き叫んでおりました。そして、とうとう三百五十人ほどが船のいない埠頭に残されてしまいました。

最後に松岡氏らの乗った大きな機械船が出帆します。陸に残った人々は一斉に呪いの言葉を吐きます。気が狂ったのではないかと思えるような中年の婦人は声を限り

絶叫していました。——その時の気持ちを想像してみてください。帰るに家はないし、薄暮の江岸は寒く、明日から後のことを考えると完全に絶望しかなかったのですから。

私は飲料水の代わりに高粱酒を二升持っていたのでそれを河原氏と二人で飲みました。なんともならない気持ちでしたが、それでもポカポカと温かくなってきて気分も落ち着いてきたのです。ところが、だれも今まで気にかけていなかったのですが、目前に破損した機械船が一隻あるではありませんか。そして、船の中に人がいるなどとはだれも知りませんでした。

江岸が静かになるころ、その船中から人が出てきて来てやってもよいということになった時の喜び、これまた言語に絶するものがありました。とにかく乗船しましたが、燃料は僅かしかなく、その上、機械の部品は市内に修理に頼んでるので船を動かすことができません。その船は八路軍にガソリンを密輸してきた郡山の船でした。しかし、一同は内地に辿りつく一縷の望みをつかんだわけです。

夜が更けてくると、岸の方に大勢の中国人が集まってきました。男らは皆なにか棒のような物を持って待機しています。暴民が集合してきたことは確実です。それで、一応船の繋留網を全部解いて鴨緑江の真ん中に出ました。夜が明けて鴨緑江の鉄橋を挟みソ連軍と中央軍の間に戦端が開かれているといった噂が出て、新義州側の船も全部下流に向かって出帆しました。

翌日、機械の部品を受け取り、燃料を積み込むまでの苦労はこれまた大変でした。竜岩浦に到着するまでに二回ばかり故障して鴨緑江の河口に出たのは六日めの夕暮れでした。それまで良かった天候もそのころから墨を流したような雲が低く垂れて、ポツポツと大粒の雨が降ってきました。波も立ってきて、そのうちに河口に出た所の浅瀬に座礁してしまいました。干潮ですから満潮時まで待たなければなりません。船首を砂地に突っ込んで船尾が浮いているわけです。間もなくすごい嵐となりました。そして、とうとう船尾に穴があいて機関室はすっかり水浸しになってしまったのです。不安の一夜が過ぎても嵐はやみません。少し静まって男たちは水を汲み出す

ことに懸命でした。私もフラフラになるほどやりました。そして、昼過ぎに破損箇所も修理し機械の手入れも終えて再び出帆したのです。

何回もの座礁や故障で一同はその船のことを信用する者はいませんでした。それでも調子よく次の日の午後、三十八度線を突破したということでした。船長との当初の約束は仁川に上陸させることだったのですが、密航船だからアメリカ軍のいる所に着船したくないと言い出して、とうとう葦山に入港することにしてしまいました。船長以下船員の全部（四人）を殺してしまつて仁川に入港しようと提案した者もあつたほどです。

そして、仁川沖を通過してしまつたころ、また故障がおきました。今度は部品がありませんので、ついに機関による航海は断念のほかなしということです。その時の心細さ、陸は見えず、食う物は無くなつて、飲料水も既に無く、子供の中には船酔いでヒョロヒョロになつてなるとか水を飲みたいと探し回る子もいます。我慢のできなくなつた人たちは海水を飯盒で汲んで口にします。飲み終わるとまた飲みたくなる、そして、また飲む。まっ

たく地獄でした。

そして、再び嵐がやってきました。船は丸二日間揺れに揺れて格烈夫列島の端まで漂い着き、そこを通り過ぎれば向こうは支那海です。深い絶望が襲います。

家内が産気づいたのは十一月五日夜十一時ごろ、嵐の最中でした。そして、六日の朝早く次女を娩出した日に漁船に発見されたのです。

十一日間の死闘の後、安康（忠清南道）という漁村に上陸したのは翌十二日でした。村にひとつしかない井戸の水を我々難民が残り少なくなるまで飲んでしまいました。そこでどんどん死んでゆきます。海水を飲んだ連中が主でした。それから後は持ち物を全部とられて食器だけという悲惨な姿で、それでもまあ順調に博多に帰還しました。